

# 山の手だより

No  
35



YouTube  
小児科花火大会



TAKE FREE

ご自由にお持ち帰りください

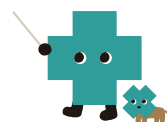
## 35号目次

3年ぶりの連携医登録大会の開催 地域医療連携室 地域医療連携係 齋藤 啓輔	2P
緩和ケア内科 若槻 百美	4P
「だ〜け〜ど〜5類になっても〜」新型コロナは新型コロナ(わらべ:めだかの兄妹 より)	
感染対策室 網島 優	5P
医療接遇研修の開催について 庶務係長 佐々木 優衣	6P
リハビリテーション科における嚥下内視鏡検査(VE)の取り組みについて	
文責 言語聴覚士 小西 博文 理学療法士 室田 英樹	7P
防火訓練を経験して 栄養管理室 栄養士 田口 拳大	8P

まいにちから、  
まんいちまで。

## 「3年ぶりの連携医登録大会の開催」

地域医療連携室 地域医療連携係 齋藤 啓輔



6月1日、ホテルニューオータニイン札幌において、第4回北海道医療センター連携登録医大会を開催いたしました。

連携登録医とは、患者さんに一貫性のある医療を提供するために、当院と地域の医療機関が緊密な医療連携を図れるよう医療機関を登録する制度であり、年に一度、連携登録をしている医療機関の先生や看護師さんと当院の職員が一堂に会し、症例検討や懇親会を行っています。2018年10月に第1回を開催し、翌2019年に第2回を開催後、コロナに見舞われ第3回はオンラインでの開催としていました。約3年ぶりの開催となりましたが、当日は、院外から68施設119名にご参加いただき、当院職員と合わせると200名を超える盛大な会となりました。

第一部は当院整形外科永野先生より「地域で取り組む持続可能な骨粗しょう症治療」、静明館診療所 大友先生より「5類で取り組む持続可能な地域の感染対策」の講演をしていただきました。両講演とも地域が抱える課題や今後について示した素晴らしい



会場



総合司会



静明館診療所 大友先生講演



長尾院長あいさつ





内容でした。時間もバッチリ守って頂けましたので、運営側としても大変助かりました。

そして第二部は懇親会を行いました。会が始まる前から盛んな交流が見受けられていましたが、懇親会が始まると、皆さまのよりいっそう密な交流が見られました。懇親会のなかで、地域医療連携室長の清水先生による消化器内科の紹介、統括診療部長伊東先生のビデオレター、テーブルスピーチの企画も行いました。約1時間半の懇親会を終え、参加された皆様の笑顔にほっとした半面、「企画詰め込みすぎたかな…」と内心反省しました。

私が地域医療連携室に配属されて初めての連携登録医大会で数々の至らぬ点がありましたが、開催後のアンケートにて「有意義な会だった」、「地域の輪が広がった」など多数の嬉しいお言葉を頂き、開催できてよかったと感じました。

ここで深めた信頼関係をもとに、医療連携を更に促進し、今後も地域の医療に貢献できるよう努めてまいります。



整形外科 永野先生講演



消化器内科 清水先生の診療科紹介



伊東統括診療部長よりビデオレター



受付の様子

## 緩和ケア内科

緩和ケア内科 若槻 百美

当院で2023年5月より緩和ケア内科が開設されました。

「緩和ケア」とはがんを中心とした命を脅かす病気による身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛や苦悩を和らげることで、生活の質を上げることを目標とするものです。痛みや倦怠感などの身体的苦痛や、気持ちの落ち込みや不安などの精神的苦痛をもつ患者さんやご家族に対して、薬剤の調整や心のケアにより苦痛を和らげます。「緩和ケア＝終末期ケア」と思われがちですが、がんと診断されたときから、つらさを感じたときにはいつでも、がん治療と一緒に受けることのできるケアです。

これまでも当院では「緩和ケアチーム」として、医師、看護師、がん相談員、薬剤師、心理士、ソーシャルワーカー、リハビリ専門職、管理栄養士など、さまざまな職種が協力しながら、患者さんにご家族を包括的にサポートしてきました。つらい症状への対処はもちろんのこと、療養の場の相談や、意思決定支援や終末期の鎮静などの倫理的な問題への助言、家族ケア・遺族ケアも行なっております。

この度、開設された「緩和ケア内科」は「緩和ケアチーム」の中心となり活動し、より専門的な「緩和ケア」を外来通院中・入院中と切れ目なく提供し、患者さんが生活の質を維持しながら自分らしく暮らすことができるよう支援します。

また当院では「緩和ケア室News」として定期的に緩和ケアに関する情報を発信していますので、院内の掲示やホームページをぜひご覧下さい。







## 「だ～け～ど～5類になっても～」新型コロナは新型コロナ (わらべ：めだかの兄妹 より)



感染対策室 網島 優



5月8日に新型コロナウイルス感染症が2類相当(正確には新型インフルエンザ等感染症)から5類に感染症法での扱いが変更になりました。通常のインフルエンザと同様となり、政府が行動を制限することがなくなりましたので集会や宴会・会合がコロナ前のように行われるようになり、マスクの着用率も急速に低下しています。それ自体は当然の流れであり良いことだと思いますが、新型コロナウイルスの感染力は相変わらず強いので、引き続き時と場所に応じた注意が必要です。

屋外でのマスクは、例えばギュウギュウ詰めの中で大声で話す、叫ぶなどの状態がなければ基本不要で(フェスなどで自分だけマスクするのは難しいかもしれませんが)、自分も外歩きの際は積極的に外すようにしています。屋内でも周囲のヒトとの距離が充分取れるような場合はいらないと思いますが、明らかに換気が悪そうな狭いところはマスクをしたとしても出来れば敬遠したいところです。利用者や入院患者を守る必要がある介護・医療施設ではより一層の注意が必要であり、施設内ではまだマスク着用を原則としている施設がほとんどだと思います。

当院も3月のマスク着用の個人判断が始まるのに合わせて、院内でのマスク着用をお願いするお知らせを出しております。職員も院内感染防止のために原則マスク着用を継続しておりますので、ご理解、ご協力の程よろしくお願いいたします。面会も原則禁止から、予約制、人数・時間制限のもとで再開しております。面会については感染症の流行状況の他、安全・防犯面からの配慮等も必要ですので合わせて院内で検討継続中です。診療面ではインフルエンザなどの他の感染症と同様に、院内感染に注意しながら日常診療の中で対応していく体制に移行しておりますが、北海道で新興・再興感染症対策に重点を置いた新しい感染症予防計画を作成中で、当院は今後も引き続き協力していきたいと思っています。

新型コロナの感染は多くが飛沫・エアロゾル感染であり、物品表面の消毒の役割はそれほど大きくないとされていますが、新型コロナだけではなく、今年は例年になく流行がみられたヘルパンギーナや感染性胃腸炎などのその他の感染症対策としても手洗いや手指消毒の励行と、適切な場面でのマスクの着用、マスク未着用者と数多く接する場面でのアクリル板の活用(突然厄介者になってしまいましたが、使い方によっては今後も有用だと思います)などの飛沫、エアロゾル感染対策は今後も重要です。また体調不良時は無理せず休むことも大切なポイントです。ワクチンは秋冬の全住民対象の接種に向けて、現在流行しているXBB系統のオミクロン株対応ワクチンを生産中とのことですので、接種をご検討頂ければと思います。

## 医療接遇研修の開催について

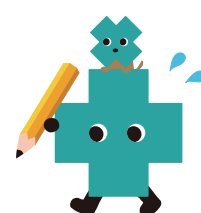
庶務係長 佐々木 優衣



7月3日にラ・ポール株式会社の福岡かつよ先生を講師としてお招きし、医療接遇研修を開催しました。この研修は、今年5月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類に移行したことを受け、患者さんやご家族と当院職員が接する機会が増えていくことを想定し、患者さんやご家族が安心して当院に関われるよう、職員の接遇を向上するために開催されたものです。

研修会には、医療職から事務職まで総勢100名を超える職員が参加しました。当院に来院される方の中には、緊張や不安を抱えている方が多くいらっしゃると思います。そのような方の気持ちに寄り添うために、医療従事者として基本となる接遇をグループワークも交えながら改めて確認し、気づきの多い、実りある時間となりました。参加した職員からは、「接遇の重要性を再確認できた」、「今後に活かしていきたい」などの感想が寄せられています。

患者さんやご家族を初め、当院に来院される方がいつも気持ちよく過ごせる病院であるよう、職員一人ひとりが今回の研修で学んだことを心がけて参ります。





# リハビリテーション科における 嚥下内視鏡検査(VE)の取り組みについて

文責 言語聴覚士 小西 博文 理学療法士 室田 英樹

## 小川先生 自己紹介

本年4月より毎週金曜日に勤務しております北海道大学病院リハビリテーション科の小川と申します。これまでリハビリテーションの中でも特に摂食嚥下障害(食べること、飲むことがうまくできなくなること)の診療や研究に携わってきました。当院でも嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査を実施し、患者さんが安全に食事を続けられるように、適切な食事形態や対応方法を検討しています。嚥下に関するご相談等ありましたらお気軽に当科までご相談ください。



小川先生

## 嚥下機能検査の取り組み

当院のリハビリテーション科は、今まで耳鼻咽喉科と協力しVE検査やVF検査を実施して参りました。

今年度から、毎週金曜日の午後のみ小川医師が赴任されました。それに合わせてリハビリテーション科医師と言語聴覚士のスタッフを中心に毎週金曜日の午後から、嚥下内視鏡検査(VE)と必要に応じて嚥下造影検査(VF)を実施しております。対象となる患者様は、食事時のむせや誤嚥などの摂食・嚥下障害のある脳梗塞や脳出血などの脳血管疾患を始め、パーキンソン病や重症筋無力症などの神経内科領域の疾患など幅広く対応をしております。高齢化に伴い、誤嚥性肺炎を患う患者様も多くなっているため、摂食・嚥下障害の患者様に対し食事形態の調整や訓練方法を提供し嚥下機能回復のサポートをしております。

また耳鼻咽喉科での嚥下機能評価も引き続き実施しており、フレキシブルな対応を行っております。



VEの様子

## 嚥下カンファレンス

嚥下カンファレンスでは毎週金曜日のVE検査・VF検査終了後に、リハビリテーション科医と言語聴覚士、また主治医なども参加し、検査結果と今後について検討し、食形態や今後の訓練内容などについて意見交換をしています。



カンファの様子

# 防火訓練を経験して 栄養管理室 栄養士 田口 拳大

私は今年度の防火訓練に避難誘導班として参加させていただきました。

避難誘導班は、患者役の車椅子を押す、腕組での介助を行う、歩ける患者役の誘導を行うなど、避難介助が役割となっています。他には初期消火を行う消火工作班、関係者に連絡や館内放送を行う通報連絡班などの様々な役割があります。

訓練では各自が積極的に現在の避難の進行状況を発信しており、患者の避難完了から職員の避難開始までの情報の伝達が早く、的確な指示もあったため、素早く避難を完了することができました。

しかし、訓練では予め役割が決められているため、判断に迷うことなく行動ができますが、実際の災害時はその場の職員で冷静に判断し、臨機応変に対応する必要があります。また、今回は火元が事前に判明していましたが、実際はいつでも起こるかわからないため、どんな状況でも一職員として災害対応などの役割を果たせるようにしていきたいです。



担送患者(ストレッチャー)の避難

護送患者(車イス)の避難

護送患者(自力歩行不可)の避難

避難場所

消火栓による消火活動

本部の立ち上げ

経過の記録

消防局による講評

まいにちから、  
まんいちまで。

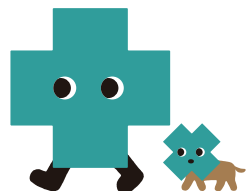


独立行政法人 国立病院機構

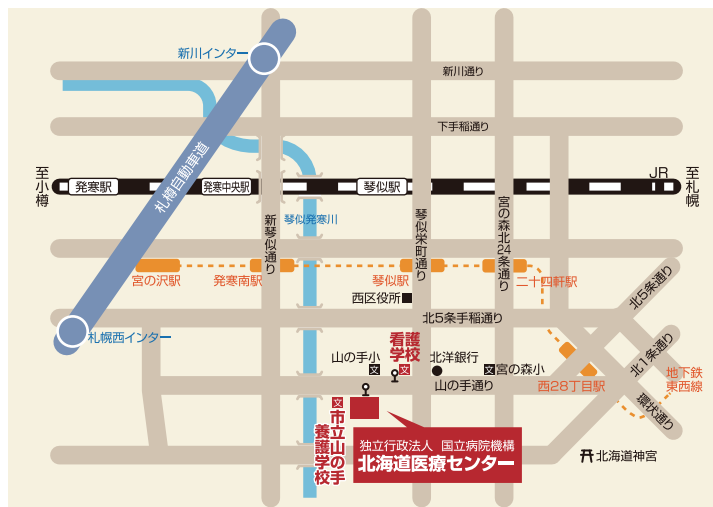
北海道医療センター



TEL 011-611-8111



〒063-0005 札幌市西区山の手5条7丁目1番1号



## ●交通のご案内

地下鉄東西線  
西28丁目・・・ 山の手線  
北海道医療センター前 下車  
西21 山の手線  
北海道医療センター前 下車

地下鉄東西線  
宮の沢駅・・・ JRバス  
西21 山の手線  
北海道医療センター前 下車

地下鉄東西線  
琴似駅・・・ JRバス  
琴43 西野中州橋線  
北海道医療センター前 下車

JR  
JR琴似駅・・・ ■タクシーご利用の場合  
○JR琴似駅より・・・ 約1,200円前後  
○地下鉄琴似駅より・・・ 約1,000円前後

車で・・・ ■旭川・苫小牧方面より自動車ご利用の場合  
札幌自動車道新川インターから  
新琴似通り経由、山の手通り沿い  
■小樽・余市方面より自動車ご利用の場合  
札幌自動車道札幌西インターから  
北5条手稲通り、新琴似通り経由、山の手通り沿い

<https://hokkaido-mc.hosp.go.jp>

北海道医療センター

検索